

近世ヨーロッパ商業史・経済史に関する覚書 —オランダの事例を中心に—

玉 木 俊 明

目 次

はじめに

1. 取引費用—ダグラス・ノースの影響
2. 商人=企業家論の形成とステープル市場
3. アムステルダム の 興 隆
4. 近世商業の特徴
5. 商人のネットワーク—国際貿易商人と地元の商人
6. 国際収支と手数料収入

おわりに

は じ め に

最近、近世オランダの穀物貿易に関する書物を著したミルヤ・ファン・ティールホフは、オランダを代表する商人として、16世紀後半から17世紀初頭にかけてはヤン・ピーテルスゾーン・ホーフトを、19世紀前半についてはウィレム・ド・クレルクをとりあげた。前者は勃興期の、後者は衰退期のオランダ商業を体現する¹⁾。

彼女によれば、この二人の商業活動は、以下のように描写できる。

コルネリス・ピーテルスゾーン・ホーフト（1547～1626）はバルト海貿易で多数を占めたメノー派に属し、「拡張の時代」のオランダ経済を代表する人物であった。父親は船長であったが、息子を、より安全な職業である貿易商人にした。コルネリスはやがて、アムステルダム市長にまでなった。アムステルダムを拠点としたコルネリスの主要な取引商品は穀物であった。家族の絆は強く、ダンツイヒに住む兄弟や、ノルウェー、フランス、ポルトガルで定住する従兄弟がいた。彼らの絆は、商業活動につきものリスクを減少させた。この時代にヨーロッパ各地でオランダ人コミュニティが形成され、コルネリスはその一翼を担った。

一方ウィレム・ド・クレルク（1795～1844）は、貿易が衰退した時代のオランダ商人であった。彼は1824年にオランダ貿易会社（Nederlandsche Handel-Maatschappij）が設立されるとすぐに、衰退していたS & P・ド・クレルク商会から手を引き、この商会に雇われた。もはやバルト海地方の

1) ティールホフ（2005）。

貿易で利益が出せなくなっていたのがその理由の一つであった。この時代のバルト海貿易商人も主としてメノー派に属していた。しかし、ホーフトの時代とは違い、信用は商人個人だけではなく、商会にあるようになった。そのため、商会の代表者が変更した場合でも、商会の名称が変わることはなくなっていた。

これは確かに、オランダの商業活動に関する二つの事例を提供したに過ぎない。しかし同時に、オランダ経済の盛衰をかなり反映していることも事実である。とはいえ彼女の視点はあくまでナショナル・ヒストリーとしてのオランダ商業史にあり、他国との比較という視点はあまりはない。だがオランダ商人の活動は、他地域のそれと大きく関連していたはずである。また各地域の商人の営みは、それぞれの地域の商業・経済発展や衰退と密接に関係していることにも、疑いの余地はない。

本稿では、このような観点から、オランダを中心として、近世のヨーロッパ商業・経済の展開を素描してみたい。また同時に、ミクロな次元の商人ととよりマクロな次元である国家の経済活動との接合を試みたい。それにより、今後の研究の新たな視座を提示する。

ウォーラステインの世界システム論によって、オランダが世界最初のヘゲモニー国家と捉えられたことはもはや旧聞に属する。しかし『近代世界システム』の第1巻が出版されて30年以上経過²⁾、オランダの研究状況も大きく変わり、特に財政史・金融史の研究が発達した³⁾。またド・フリースとファン・デル・ワウデが『最初の近代経済』を上梓し⁴⁾、オランダが世界で初めて持続的経済発展を成し遂げた国だと主張した。

おそらく、持続的経済発展を成し遂げたという点で、オランダは近代世界の創始者であった。本稿も、基本的にはこの立場をとる。ただしオランダという国家ではなく、オランダ商人の優位性を重視したい。明らかに16世紀末から17世紀中頃のオランダは、ヨーロッパ世界最大の経済大国であった。時代とともにオランダの優位が崩れていき、他国の商人が活躍するわけだが、それをオランダの商業技術の伝播の過程と考える。換言すればオランダ商人に別の商人が取って代わるのではなく、オランダ商人によって別の地域の商人が台頭したとみる。

またこの時代は、いわゆる「重商主義時代」に属す。その特徴は、オランダを除く列強諸国が基本的に保護貿易政策をとった点にある。しかしその一方で、国境を越えた商人の活動が目立ったのも事実である。本稿の議論の中核はむしろ商人の活動であるが、国家の通商政策についても触れる。さらに貿易商人と国家の枠組みを関連させるにあたり、貿易収支（貿易差額）ではなく国際収支の問題を重視する。なぜなら、商人が貿易を行なうに際し、輸送費用が極めて高く、それは貿易外収支に属し、また、重商主義時代の貿易政策を考察するにあたっては、輸送料の問題を抜きには語れないと考えるからである。

2) ウォーラステイン (1981)。原著は1974年の出版。

3) 't Hart (1993); Fritschy (2003); Gelderblom and Jonker (2004) など。

4) De Vries and Woude (1997)。

以上のような問題意識のもと、本稿は次のように構成される。まず、近世商人の研究に大きな影響を及ぼしているダグラス・ノースらの新制度学派の取引費用の概念を紹介し、その長所・短所を述べる。次に、商人＝企業家論の発展について論じる。さらに16世紀に台頭し、17世紀中葉に「黄金時代」を経験したオランダの貿易商人の活動について一瞥する。とりわけ、アムステルダムに役割に焦点があてられる。新制度学派の議論に基づいたティールホフの議論をやや詳しく紹介し、その議論が、少なくともアルプス以北の経済史の現在の潮流の一つであることを示す。そしてオランダの経済が停滞し、イギリス、スウェーデン、フランスならびに貿易港としてハンブルクが台頭していく時の貿易商人の活動とオランダとの関係を描写する。最後に、輸送費用と国際収支の関連について論じ、商人の研究（質的研究）と国家の国際収支（量的研究）を接合し、新たな経済史・商業史研究の方法に関する試案を提示したい。

1. 取引費用——ダグラス・ノースの影響

現在、北方ヨーロッパの商業史研究において、ダグラス・ノースの影響力は極めて大きい。どの国を対象とするにしても、新制度学派の影響力は無視できないほどである。1993年にノーベル賞をとって以来、ノースの影響力は強まり、その中でも、特に『制度・制度変化・経済成果』⁵⁾の影響が強い。そのノースは、取引費用の減少を最も重視する。取引コストが低下すると、貿易が刺激され、経済が発展するからである。

この取引費用とは、ようするに商業取引にかかわるすべての費用だと定義づけられよう。経済発展を促進するのは、取引費用を削減する制度をもつ社会であり、西欧世界が勃興したのも、そのような制度をもつ社会を形成できたからであるとノースは主張する⁶⁾。

ノースの議論は、コースの「取引費用」の概念を発展させたものである。コースは、人々が企業内で生産するか市場から調達するかどちらを選択するかは、取引費用が決定するとした。また、どのような制度が選択されるかも、取引費用の大きさによって決定されると主張した。ここからスティグラザーのいう「コースの定理」が導き出された。つまり、「取引費用がゼロの世界では、財政権構造がどのようなものであっても、当事者間の交渉を通じてパレート最適が達成される」⁷⁾のである。

しかしいうまでもなく、現実世界においてはパレート最適は存在せず、「コースの定理」はあくまで理論上の仮説にすぎない。したがって実態経済ないし経済史の分析においては、コースではなくノースの方が分析ツールとしては有効だろう。おそらく部分的にはこういう事情から、ノースの理論が採用されたものと思われる。

ノースに代表される新制度学派の経済史に対する批判として、岡崎哲二氏が「対象となる制度が

5) ノース (1993).

6) ノース (1994).

7) Coase (1960).

主として国家による所有権の保護に限定されていた」⁸⁾と述べている。しかしこれは、正鵠を得たものとはいえない。周知のように、岡崎氏はグライフに代表される歴史制度分析を高く評価する。制度は「技術以外の要因によって決定される自己拘束的な行動に対する制約」であり、「自己拘束的」というのは、社会を構成する人々が、その制約にしたがうインセンティブを持っていること、いいかえれば、その制約にしたがう行動計画が、社会を構成する人々がプレイするゲームのナッシュ均衡になっていることを意味する⁹⁾。それに対しノースは、取引費用を節約するような制度が、いわば自動的に採用されるという見方に立つことにより、制度の生成のメカニズムを事実上、ブラック・ボックスに入れている¹⁰⁾、と岡崎氏は批判する。確かに私自身、ノース自身の議論にはそういう側面があることは否定できないと考える。

しかし少なくとも私の知る限り、北方ヨーロッパ諸国では、グライフよりもはるかに頻りにノースが引用されている。現在の研究では、ノースを出発点として、単に国家による制度だけではなく、国家とは別個の商人組織による取引費用削減も研究対象となっているからである。たとえばティールホフは、情報獲得の費用削減による取引費用低下に注目し、ルーカッサンとウンガーは、近世の国際貿易における乗組員一人あたりのトン数の低下を主張した¹¹⁾。

むしろ、岡崎氏らが主張する歴史制度分析の方が、ミクロ経済学のゲーム理論を用いた最適化行動による分析に力点を置きすぎており、研究対象が狭くなる傾向があるように感じられる。そもそもナッシュ均衡がなりたつ社会が、現実にどれほどあるというのか。まずそこから議論を始めるべきだろう。あまりに稀少な事例から、一般化を目指すことには大きな危険性がつきまとう。また、現実の史料から、何が最適化を決めることは根本的に不可能である。われわれができることは、ある制度より別の制度の方が経済的効率が良いと指摘することにとどまらざるをえないだろう。

とはいえ取引費用の概念には、さまざまな問題点があることも否定できない。最大の問題点とは、おそらく、ほとんどの費用が計量不可能な点にある。たとえば、A国とB国の二国があり、それぞれ取引費用の要素となる要素がイロハニホへの六つあるとする。A国ではイ・ロ・ハの、B国ではニ・ホ・への取引費用が低下したとする。しかしイ・ロ・ハとニ・ホ・への取引費用のどちらがより大きいかは決められない。したがって、取引費用に基づいた比較史研究は現実には不可能になる。この点に、取引費用の議論の大きな限界がある。この問題に関する、北方ヨーロッパ諸国の研究者の態度はあまりにナイーブとしかいいようがない。しかし、少なくとも一国史の観点からは、取引費用の低下は、分析道具として有効である。そもそも彼らは比較史という観点があまりないのだから、自国の取引費用低下だけで十分な意味があるのだろう。

8) 岡崎 (1999).

9) 岡崎・中林 (1999) 2-3.

10) 岡崎・中林 (1999) 3.

11) Lucassan and Unger (2000).

2. 商人＝企業家論の形成とステープル市場

経済の発展は、需要曲線と供給曲線では説明できない。理論経済学の教科書では欠如している¹²⁾、経済を発展させる主体が必要であることは言を俟たない。それが、企業家である。シュムペーターによれば、企業家の役割の根幹はさまざまな新たな経済要素を導入するか、既存の経済要素の組み合わせを変えることで新商品・サービス——新結合ないし革新——を創出し、それを市場に導入することで経済を発展させる点にある¹³⁾。現在ではシュムペーターの企業家の理論は、経済学部ではなく経営学部で教えられることが圧倒的に多い。しかしその場合、経営学の性質からか、企業の発展の担い手という意味合いが強く、経済発展の原動力という認識は少ないように思われる。

ともあれシュムペーターの影響を受け、現在の研究では、近世の商人は「企業家」(entrepreneur)と呼ばれることが多い。これは少なくとも、オランダと北欧では既に定着した用語だと考えられる。したがってここでは、商人＝企業家として捉える¹⁴⁾。まずそれについて、若干の説明が必要であろう。

近世の商人を企業家と捉えたのは、クレインが最初である¹⁵⁾。トリップ商会の研究をした彼は、近世の商人が法的ないし経済的に特定の商品を独占していたという理由で、シュムペーターの理論に基づき、彼らを独占商人だと考えた。トリップ家は、銅、茶などを独占した。

彼の主張の決定的な問題点は、近世の独占と、現代の独占とを同一視している点にある。すなわち、シュムペーターが論じた19世紀末から20世紀の独占は、市場経済の中で競争相手に勝って独占を状態に至ったのに対し、近世の独占は、場合によって国王が特許状によって与えたものだった点にある。また、市場経済が機能している現代とそうとはいえない16～17世紀を直接比較することにはそもそも無理がある。シュムペーターが独占を擁護した時代は、アダム・スミスのいう「見えざる手」ではなく、経営者資本主義を唱えたチャンドラーによる「見える手」¹⁶⁾が生まれており、企業が価格を決定する力が強くなっていた時代である。現在の近世ヨーロッパ史の企業家論には、基本的にこのような考察が欠けている。

とはいえこのような問題点があるにせよ、現在、近世の商人を「企業家」(entrepreneur)と捉えることは、一つの常識とさえなっている。

近世商人を企業家とした場合、その特徴として、ステープル市場との関係がある。クレインとフェルウェンキャンプは、こう主張する¹⁷⁾。

商品、人員、通信の伝達速度は遅く、危険で高くついたので、ほとんどの貿易商人は、定期

12) オブライエン (2004)。

13) シュムペーター (1977)。

14) Klein and Veluwenkamp (1993); Goey and Veluwenkamp (2002)。

15) Klein (1965)。

16) チャンドラー (1977)。

17) Klein and Veluwenkamp (1993) 31。

的に開かれることはあまりない地域的なステーブル市場しか訪れなかった。長距離を旅行しても、儲からなかったからである。これらの地域市場の剰余は、より高度な水準の市場で取引された。その結果、市場のハイアラーキーが生じ、頂点に位置したのが、中心的・恒久的な商品集散地、すなわち具体的な世界市場であった。この商品集散地で活動する商人が蓄積され、彼らが世界市場のためにこの商品集散地でステーブル機能を果たしたのである。商人は、かなり不規則的な供給と、それよりも均等に進行する販売の間の緩衝財となった。

ここにみられるように、ステーブル市場には階層性があった。その頂点にあり、世界市場での取引がなされるステーブル市場で活躍する商人が国際的貿易商人である。これはまた、1931年にオランダのステーブル市場に関する書物を著した——ただし、クレインとフェルーウェンキャンプの批判対象ではあるが——ファン・デル・コーイの立場でもある¹⁸⁾。しかし、需要は供給と比べるとはるかに安定している。近世の商人は、現在と比較すると、極めて不安定な状況下で事業を営んだ。海賊が出現したり、難破する可能性は高かった。保険や金融技術は未発達であり、情報はあてにならず、情報の非対称性は極めて大きく、通商にも通信にもかなり時間がかかった。換言すれば、取引費用が非常に高かったのである。

アムステルダムของステーブル市場論については、杉浦未樹氏が簡潔にまとめている¹⁹⁾。近世期オランダの流通構造を扱う研究は、アムステルダムを世界の貿易流通が結節し、ヨーロッパ内への商品の分配が行なわれる世界的ステーブル (Wereldstapel) と位置づけ、その貿易拡大に注目してきた。アムステルダムは、ヨーロッパ最大の商品市場であり、貿易の決済・金融・保険などのサービス提供、情報収集の面でも世界の中心であった。アムステルダムは多様な商品を集積した点ではアントウェルペンと同じであるが、商人ははるかに能動的に活躍していた。

市場の階層性に対する反論として、最近、アムステルダム・ステーブル市場に関して、クレ・レスハーが興味深い論を発表した。諸都市が階層的にではなく、並列的に流通分業をしたと主張したのである。アムステルダムは階層の頂点に立つ都市ではなく、それ以外にも重要な都市が存在した。アムステルダムの機能として重要なのは、仲介貿易業ではなく、情報や金融仲介業であった²⁰⁾。またアムステルダムは、前面地と後背地を結ぶゲートウェイの役割を果たしたという²¹⁾。

近世のヨーロッパにおいて、アムステルダムが最も重要な国際商業都市の少なくとも一つに属したことは間違いない。その機能としてどういう点が重要であったのかは、簡単には決められない。しかし他のヨーロッパ都市と比較するなら、17世紀のアムステルダムがヨーロッパ最大の貿易都市であったことは間違いない。また、ヨーロッパ金融の中心地であったことも確かである。少なくとも外国人研究者にとって大切なことは、この視点ではないか。

18) Kooy (1931).

19) 杉浦 (2004).

20) Lesger (1999).

21) Lesger (2002).

アムステルダム自体でどのような機能が重要であったかは決定できないにせよ、17世紀のヨーロッパ全体でみた場合、貿易都市アムステルダムの重要性には、疑いの余地がない。もちろん、金融部門、情報部門においても、アムステルダムは他の都市と比較すると抜きんでていた。経済学的に言えば、この三分野において、アムステルダムには絶対優位があった。このことを抜きにして、ナショナル・ヒストリーの観点からアムステルダムを論じることは、少なくとも外国人にとってはあまり意味のあるものではないだろう。言い換えるなら、この時代のヨーロッパにおける最大のステープルはアムステルダムであったという事実の方が大事なはずである。

貿易・金融・情報の三分野で、17世紀のアムステルダムがヨーロッパ第一の都市であり、そのどれもがアムステルダムの経済的優位を支えた。つまり、アムステルダム・ステープルは、この三部門のすべてが他の都市よりも優れていたからこそ成立したということができよう。

このように考えると、ステープル市場における企業家の役割は、この三分野のすべてで非常に大きかったと考えられる。したがって必要なことは、アムステルダムと近世の企業家の特徴の分析であろう。この点に関してヘルデルプロムとファン・ザンデンは、前近代と近代の企業家の相違を、後者が革新を継続したのに対し、前者は模倣を続けた点にあるとした²²⁾。しかしこれは、近世の企業家の能力を過小評価し、近代のそれを過大視したものだだろう。現実には近世であれ近代であれ、継続的革新も模倣もあったはずだからである²³⁾。近世世界の特徴については、第4章で述べたい。

3. アムステルダムの興隆

中世においてバルト海貿易を担っていたのは、周知のようにハンザ商人であった。ハンザ商人は西欧との取引で、リューベック-ダンツィヒ間の陸上ルートを使っていた。16世紀中葉になってオランダがハンザに取って代わってバルト海貿易の覇者になれたのは、比較的最近までの通説によれば、中世の航海技術では航行困難であったエーアソン海峡を通る航路の開拓に成功したからであった。現在ではこれ以前にもハンザの船舶がエーアソン海峡を航行していたとの説が有力になってはいるが、それでもおおまかにいって、エーアソン海峡をより有効に使ったのがオランダ商人であることも否定できまい。これは、ハンザ商人とオランダ商人の間の断絶面よりも、連続面の方が強調される傾向を示すものだと考えられよう。

たとえばダンツィヒにおいては、ハンザ商人とオランダ商人が婚姻関係を結んでいたことをミルヤ・ファン・ティールホフが証明し²⁴⁾、この間に必ずしも断絶があったわけではないことがわかってきた。おそらく、商業技術の継承もみられたであろう。しかし、詳細は不明である。また、オラ

22) Gelderblom and Zanden (1997).

23) ただしシュムペーターの議論をそのまま持ち込むなら、企業家とは絶えず革新（創造的破壊）を行なう人々であるから、本来なら、このような主張はできないはずである。

24) Tielhof (1995).

ンダ商人はダンツイヒとの貿易に従事しており、ポーランド内部ではポーランド商人が活躍していたことが判明している。オランダはバルト海地方と西欧との貿易で中心的役割を果たしていたが、オランダ国内を除けば、あくまで海上貿易に限定されており、後背地の取引にまで進入することはなかったようである²⁵⁾。

オランダのバルト海貿易の拠点はアムステルダムであった。この貿易こそがオランダの「母なる貿易」であった。17世紀オランダの「黄金時代」は、バルト海貿易と密接な関係があったことはいうまでもない。オランダ経済におけるバルト海の地位が低下するのは、17世紀後半以降のことである。

16世紀後半から17世紀にかけて、アムステルダムは巨大化した。それはさまざまな地域から、人々が移住したからである。この点で近年最大の業績は、ヘルデルブロムの研究である²⁶⁾。彼は、1578～1630年のアムステルダム商人の研究をし、5,000人の卸売商人の氏名を収集した。さらに、850名の商人が南ネーデルラント出身の商人を確認した。ヘルデルブロムは、これらの商人の移住・職業・経済活動・社会的地位・富・宗派を分析した。グループごとの分析では、新しくアムステルダムに到来した商人と従来からいる商人の間での事業戦略の相違や関係は発見できなかった。卸売企業の日常の経営もわからなかった。しかし明らかになったことがいくつかある。何よりも大切なのは、アントウェルペンからアムステルダムへの移住は、既に1540年代から始まっており、彼らの中には、バルト海貿易に従事した者もいたことである。1580年代末までに、200名以上の商人が、アントウェルペンからアムステルダムに移り、事業を続けた。1609年には、南ネーデルラントから450名もの企業家がアムステルダムに移住し、卸売業に従事した。1610年以降、第二世代が移住したが、その数は350名程度であった。移住した人々のほとんどは裕福ではなく、アムステルダムに来てから国際貿易に従事するようになったのである。17世紀にいたるまで、南北ネーデルラント出身の商人は、家族のメンバーとの協同作業を重んじた。それは、アントウェルペン出身で、ダンツイヒとアムステルダムで国際商業に従事したハンス・テイスの事例研究からもうかがえる。そうして、情報獲得の費用と強制力を行使するための費用 *information and enforcement costs* を低下させたのである²⁷⁾。

ヘルデルブロムは、アムステルダム勃興に際しての、南ネーデルラント商人の役割を強調する²⁸⁾。既に古典的となったブリュレの論文²⁹⁾によって、アントウェルペン商人が与えたアムステルダムへの影響の大きさについては、周知のことであったが、ヘルデルブロムはさらにそれを押し進めたのである。アントウェルペンからの移住商人は、アムステルダム商人全体の三分の一に達

25) Bogucka (2003).

26) Gelderblom (2000a).

27) Gelderblom (2003a).

28) Gelderblom (2000b).

29) Brulez (1960).

した³⁰⁾。アントウェルペンでは富裕でなかった商人も多数アムステルダムに移住した³¹⁾。ただ、彼の見解では16世紀後半のアムステルダム台頭後も、アントウェルペンは重要な貿易港・金融拠点として機能した³²⁾。南部諸州からの商人は、アムステルダムの穀物輸入に資金を提供した³³⁾。ジェノヴァ→アントウェルペン→アムステルダムと、商業技術の伝播があったと考えられる。アムステルダム市場は、このような商業技術の移転の上に成立したのである。

タールトによれば、17世紀において、オランダほど低利で金を借りられる国はジェノヴァだけであった。金融上の信用があったことが、オランダが17世紀の戦争で勝つことができた理由であった。1620年に150万ギルダーあったホラント州の借金は、スペインとの戦争が進につれて膨れ上がり、1647年には1,500万ギルダーに達した。オランダの金融市場は柔軟性に富み、世界的金融市場と国際的商業資本の流通をたやすく利用でき、とくに証券取引所とアムステルダム銀行という健全な金融機関があったので、金融上の革命に成功した。オランダにはランティエが多数存在していたので、簡単に借金をすることができたからである³⁴⁾。

ヨーロッパの商業拠点となったアムステルダムには、巨額の資金が蓄積されたのは、このような理由による。そのためヨーロッパの決済の拠点となった。1609年にアムステルダム銀行が創設されたことが、それを裏づける。商業・金融両面で、アムステルダムが大きな役割を果たすようになったのである。そのため、情報が集積され、情報の集積地にもなった。それはさらに、アムステルダムでの取引費用を低下させることになった。

以上が、アムステルダムが他を圧倒する貿易都市となった過程のおおまかな描写である。当然アムステルダムはコスモポリタンな都市となり、数多くの商人がこの都市を訪れた。アムステルダムからも数多くの商人が海外に移住した。このような様子は、ヨーロッパの多くの商業都市でみられた現象であろうが、アムステルダムがその最大規模の都市だったことも間違いない。

4. 近世商業の特徴

近世においては、既に述べたように不確実な要素が多かった。したがって商品の供給量は激しく変動した。このような社会において、リスク分散のために、血縁関係に頼る率が、今日とは比べ物にならないほど多かったことはいうまでもない³⁵⁾。最も信頼がおける相手とは、血縁関係者にほかならなかったからである。さらに、同一の宗教集団に属する人々の間での取引もまた、場合によってはそれと同程度の信頼性を提供した。たとえばティールホフによれば、オランダのバルト海貿易

30) Gelderblom (2000b).

31) Gelderblom (2000a).

32) Gelderblom (2003b) 277.

33) Gelderblom (2003b) 249.

34) 't Hart (1989).

においてはメノー派のネットワークが重要であった。スペイン系ユダヤ人のセファルディム、ユグノー、アルメニア人、ジャコバイトが全ヨーロッパ的な交易ネットワークをもっていた³⁶⁾。

むろん中世においても、近世以上に不確実な状況は存在した。それゆえ中世的な経済発展と近世のそれにどのような相違があったのかということも、重要な問題だろう。本質的な相違を挙げるなら、近世における持続的経済発展の誕生と、国家による商人の保護の増大である。後者は、フレデリック・レインがいう保護費用³⁷⁾を商人が負担するということから免除し、結果的に取引費用を低下させたと想定できる。

ところで本稿で対象とするのは、重商主義時代のヨーロッパ商業史である。重商主義国家の特徴は、国家が貿易を保護した点にある。その代表例として、イギリスの航海法を挙げれば十分だろう。重商主義国家が、取引費用を低下させたと考えられるのである。また重商主義国家は、近年「財政国家」³⁸⁾とも呼ばれ、戦争遂行のために膨大な税金をかけたとされる。その税金の中で関税が占める位置は必ずしも高かったとはいえないが、必要不可欠な税でもあった。もしも保護貿易をしなければ、そもそも関税収入はもっと少なくなっただろう。さらに、植民地物産流入により、消費構造が変化し、新たに流入した新大陸産の商品を購入しようという動きが、経済発展につながったと主張される³⁹⁾。

近世商人の活動が極めてパーソナルな関係に依存していたことは、ここに述べた状況に由来する。近代になると、国家が商業を保護し、通商と通信の時間は大幅に短縮され、船舶も大型化し、情報の入手は比較的容易になり、取引費用は大幅に低下した。商人のパーソナルな関係がインパーソナルな関係に変貌していく過程が、近世から近代への移行と位置づけることもできよう。

不確実性が高かったので、近世商人は信頼のおける親族・家族・同じ宗派の人々との協同作業を選択した。また、一隻の船を丸ごと一人で所有することはせず、分担して所有した(分担所有)。これは、リスク分散のために行なわれた。「近世貿易」とは、信頼のおける情報が少なかったもので、それを提供する顔見知りの人間関係が大きな役割を果たした貿易システムである。それは、近世の貿易商会の規模が極めて小さく、一人ないし二人のことも珍しくなく、数名いれば大企業とさえい

35) これは現代商業では、まったく血縁関係に頼らないという意味ではない。現代でも、企業の規模が小さいほど、血縁関係者どうして協力することは、しばしばみられることである。近世の企業の規模は今日の零細企業であり、そういう点から考えるなら、親族のネットワークが重要だったのは、当たり前なことだといえよう。それに対して特許会社は、今日の大企業に相当する規模をもつ場合もあった。しかし現在の多国籍企業と比較すれば、本部(本社)の指導力をはるかに低かった。また、垂直統合度も小さかった。現地での貿易を本部が指導しようとしても、情報の信頼度は著しく低く、情報の非対称性は大きく、そのため本部が強制力をふるうことは極めて困難であった。この点から、「情報」をキーワードとした、近世と現在の企業の類似点と相違点が説明できる。

36) 深沢(1999)。

37) Cf. Lane(1979); Steensgaard(1974)。

38) Bonney(1995)。

39) 川北(1983)。Müller(2004b)。

えたことも理由とならう⁴⁰⁾。

このような視点から考えると、ドイツでフッガー一家が倒産したのも、前期的商人資本に属していたからというより、不確実性とんだ時代状況に適応できなかったという方が正しいだろう。フッガー一家は、ようするにハイリスクハイリターンの商売をしており、リスク分散を怠ったことが最大の弱点であった。実際、投機的な商人は現在でも存在し、この点で商人の時代による類型を形成することには無理がある。そもそも彼らを「典型的」な前期的商人資本だとする必然的な理由が、これまで提示されてきたとは思われない。まずあらかじめモデルを設定し、それに歴史的事実をあてはめていたのであり、そこから抜け落ちる事例を研究しようとはしなかった点に、歴史研究としての根本的な問題点がある。むしろ商人は、極めて困難な商業状況の中で、できるだけ多くの利益を得るために合理的に行動していたと考えるべきであろう。それに失敗すれば、倒産したのである。

近代になると、事業上の不確実性は大きく減少する。情報の迅速で正確な伝達（通信手段の発達）、貿易に必要な日数の低下、輸送費用の低下、国家による保護の増大、保険制度の発達などがその要因となった。そうすると、近世で必要であったリスク分散の方法は、近代になると不必要になる。現在の北方ヨーロッパ商人の研究では、このように、制度を広く捉えている。

新制度学派の理論を用いて商業史研究に従事している代表的な研究者としては、既に述べたミルヤ・ファン・ティールホフ以外にも、フランスでは、ピエリック・プルシャス⁴¹⁾、スペインについてはレギーナ・グラージェ⁴²⁾、スウェーデンではレオス・ミュラー⁴³⁾、フィンランドではヤリ・オヤラ⁴⁴⁾、デンマークではダン・アナセン⁴⁵⁾がいる。

新制度学派の考えに基づけば、特許会社ができ、遠隔地での商業の独占権が付与されたのは、自国から遠ければ遠いほど、商業活動のリスクが増える。もし貿易が独占できなければ、活動のリスクはさらに増大するので、それを少しでも削減することが必要になったからである。

さて、ここで再びティールホフの議論に立ち戻らう。近世においては、たとえば商品の価格に関する情報は乏しかった。アントウェルペン、やがてアムステルダムで取引所の価格を掲載した「価格表」が発行されることで、商品取引の不確実性は大幅に減少した。また手紙が到着する日数が短縮したため、取引費用は大きく低下した⁴⁶⁾。

また、ヤリ・オヤラによれば、コミュニケーションに時間がかかり、情報入手が困難だったことが、長期間にわたり、国際商業の阻害要因であった。しかし18～19世紀に、国際商業と海運業の

40) ティールホフ (2005)。

41) Pourchasse (2003)。

42) Grafe (1998); Grafe (2001)。

43) Müller (1998); Müller (2004a)。

44) Ojala (1999); Ojala (2004)。

45) Andersen (2000)。

46) ティールホフ (2005)。またレオス・ミュラーによれば、近世スウェーデンでは、領事館サービスによりスウェーデン船の安全性が増した。Müller (2004a)。

サービスに特化したことが、情報の利用の改善に寄与した⁴⁷⁾。

このように、情報入手が時代とともに容易になり、情報の非対称性が少なくなっていった。16世紀の商人なら、取引する都市に代理人を派遣していた。それは、家族の一員であることがふつうであった。代理人の活動に関する情報を得ることが困難だったので、信頼のおける家族を代理人として派遣することが安全だったからだ。しかしやがて商人は定住し、現地にいる委託代理商に商売を委ねた。これは、代理人の活動に関する情報入手が容易になり、モニタリングコストが大きく低下したからである。もちろんそれは、各地域の経済状況に依存していた。すべての地域で、委託代理商が発展したわけではない。オランダ人が委託代理商を使用した時代に、ハンブルクでは商人が直接現地まで出掛けて取引した⁴⁸⁾。これは、ハンブルクではアムステルダムのように情報は簡単に入手できなかったためだろう。しかしハンブルクはこのような商法によって、アムステルダムの市場を奪っていったことも事実である。また、アムステルダムが委託代理商を使うことで、マーケットの一部を奪われたことも確かなのである。ティールホフの議論では、オランダ一国の商業制度の変化しか説明できず、ヨーロッパ商業全体の中でオランダを論じるという意識が少ない。

またオランダ人が委託代理商に依存することで、オランダの商業ノウハウがあちこちに伝播したことも考えられる。したがって短期的には有利であった選択かもしれないが、長期的にはオランダにマイナスの影響をもたらした可能性もある。どの時代でもそうだが、商人は基本的に短期的利益を追求する。それが逆に、長期的不利益を産むこともある。

このように考えると、しばしばいわれるように、オランダからイギリスへのヘゲモニーの移行を、イギリスがオランダに打ち勝ったという表現を用いるのは、適切とはいえない。オランダ商業のノウハウが伝播することで、他国・他地域の商業・経済が発展し、その中でイギリスが台頭していった。つまり、オランダ商人がいたからこそ、イギリスにオランダから商業技術が伝播し、それがイギリスのヘゲモニーの要因の一つになったと考えるべきだろう。オランダがイギリスのヘゲモニーを創出したといえよう。

5. 商人のネットワーク——国際貿易商人と地元の商人

レオス・ミュラーは、スウェーデン商業史に関して、17世紀中葉の代表的な商家のモンマ・レンシエーナ家 Momma-Reenstierna と 18世紀後半に活躍したグリル家 Grill を比較し、前者が真鍮貿易を独占したのに対し、後者は異なった商業分野に投資し、リスクを分散させたと主張した。1660年代から、スウェーデン最大の貿易商品は鉄となったが、18世紀後半になると他のさまざまな商品も重要になった。この二つの商家の商業活動の違いは、スウェーデンの経済状況の相違

47) Ojala (2004).

48) Huhn (1952) 36.

を反映する⁴⁹⁾。

さらにミュラーは近世スウェーデン商業の特徴を描写した別の論文で、ストックホルムをヨーロッパの港湾都市の特徴を表す事例として提示する。

近世スウェーデン商業の特徴の一つは、ストックホルムが圧倒的に重要だったことである。ストックホルムには、多数の外国商人が住み着いた。彼らは母国との関係を重視し、母国との取引に従事した。たとえばイギリス出身の商人は、イギリスへの鉄輸出に特化した。オランダ出身のグリル家は、ストックホルムで50年住んだにもかかわらず、通信文はオランダ語で書いた。

出身国が同じ国の商人たちは密集して住み、独自の集団を形成した。そうすることで、外国出身の商人たちは、母国との貿易における比較優位を維持した。ただし彼らもスウェーデン貴族との婚姻関係を結び、スウェーデンと同化すると、外国貿易における比較優位を失っていった。彼らは、農業や製鉄業などの、国内産業に投資するようになった。しかしそれは、スウェーデン経済の変化に対応し、より儲かる分野に投資した可能性がある⁵⁰⁾。

ミュラーは、国による商人の事業パターンの違いに注目し、彼らが母国との関係を保ちながらも、最終的にはスウェーデンに同化した過程を描いている。

とはいえ、もしヨーロッパ全体を視野に入れるなら、積極的に同化した商人ばかりではなかったはずである。たとえば、ユダヤ人やアルメニア人は独自の居留地を持っていたし、ユグノーにも、そういう側面があった。もし国際商人として成功したければ、同化することが望ましかったとは考えられない。彼らはいわばよそ者として活動したからこそ、国際商人として活躍できたのである。したかって国により、民族により、宗派により、同化して現地社会に溶け込んだ商人と、同化せず本国ないし出身地との強い関係を維持した商人に分かれたと考えるのが妥当であろう。

ここで議論を整理してみよう。国際貿易商人は、取引先の地域に同化するタイプの商人としないタイプの商人に分類できる。前者はやがて国際貿易にではなく、現地での経済活動に力点を移す。現実には、この二つのタイプの商人がいなければ、国際貿易を営むことは難しかったことは想像に難くない。これまでの国際貿易の研究では、現地に同化しないタイプの商人が考察の中心だったように思われる。しかし、同化しないタイプの商人が外国との取引をし、現地の商人と取引をする場合の仲介として、同化するタイプの商人がいたと考えられるのである。

近世のオランダは宗教的寛容の地として知られ、カトリックもプロテスタントもアルメニア人もユダヤ人——特にセファルディム——もかなり自由に経済活動に従事できたのは、オランダにとって何よりも商業活動が重要だったからである。

そのオランダから、商人は各地に移動した。たとえばスウェーデンに行き、スウェーデン鉱山業の開発に尽力したルイ・ド・イエール Louis de Geer は代表的人物である。彼はトリップ家と協力し、

49) Müller (2004a).

50) ミュラー (2004).

銅や武器貿易で活躍した。ダンツイヒから輸出される穀物の多くをアムステルダム商人が輸出したことは言を俟たない。

また、多数の商人がハンブルクに移住した。オランダとボルドーのプロテスタント・ネットワークに関しては、ペーター・フォスの研究が詳しい⁵¹⁾。既に1651年に、446名のオランダ商人が、ボルドーから輸出される商品の70.8%を請負っていた。しかし17世紀末から18世紀初頭にかけて、ボルドーにおけるオランダ商人の勢力は低下した。既に蘭仏戦争(1672～78)の終りに、オランダ商人の三分の一を失っていた。「1680年代と90年代の危機」と関係した衰退は、それ以上に大きく、1670年には50数名であったボルドーのオランダ商人が、20名ほどに減少した⁵²⁾。約三分の二の低下である。したがってルイ14世の時代にフランス-オランダ間の貿易が衰退したことは、ボルドーにおけるオランダ人の委託代理商の地位の低下を示すものである。しかもオランダ商人は、取引相手市場としてボルドーよりもイベリア半島を重視するようになった。

オランダ商人に代わって台頭してきたのは、ハンザ都市の商人であった。彼らは1670年から、ボルドーに住み着くようになる。18世紀初頭にボルドーに移住した外国人としては、オランダ人が最も多かった。しかし1711年には、20名のハンザ商人が居住し、この時には既に、オランダ商人の数を少しだけ上回っていた。北ドイツの港湾都市から移住してきた商人は、ボルドー商業の発展にとって決定的な役割を果たした。その中でも特に、ハンブルク商人の興隆が際立った⁵³⁾。

しかしながら、オランダからハンブルクへの移行をあまりに強調することはできない。ド・バリー de Bary 家のように、オランダ商人が離散(ディアスポラ)し、ボルドーとハンブルクに居住し、通商関係を結ぶこともあったからである⁵⁴⁾。オランダの場合と同様、ボルドーでは、少数派のカルヴァン派の商人が、ハンザ商人と取引を行っていた。すなわち、商人間のプロテスタント・ネットワークという点では変化がなかったのである。さらにボルドー商人は、スペインのカディスと通商関係を密にし、スペイン領アメリカからドイツに大量の植民地物産が流入することになる⁵⁵⁾。

さらに、アムステルダムとロンドンの金融関係が緊密になっていったことは、ラリー・ニールの『金融資本主義の台頭』⁵⁶⁾で示されている。南海泡沫事件以降、オランダ資金は大量にロンドンに流入した。また情報面で見ても、アムステルダムとロンドンの結びつきは強まっていった。ニールは計量経済史の観点から論じているにすぎないが、通貨の動きには当然、商人・金融業者の動きもともなっていたはずである。

本稿の視点からは、これらはむしろ、オランダ出身の商人のネットワーク拡大と捉えられる。しかし、それがオランダの国益に寄与することはほとんどなかった。

51) Voss (1995). また、フランスからハンブルクへのユグノーの移住については、Pourchasse (2003) もみよ。

52) Voss (1995) 58.

53) Butel (1974) 156.

54) Voss (1988) 110.

55) Weber (2000); Weber (2002); Weber (2004).

56) Neal (1990).

この点において、イギリスとオランダの貿易活動は大きく異なっていた。フランスと比べてさえ、その違いは歴然としている。重商主義の時代に、イギリスやフランスは商人を保護し、彼らの取引費用を低下させた。さらに商人の取引相手国への同化度が低く母国との関係が強かったので、イギリス商人は母国との取引継続に比較優位を見出したと推測される。イギリス商人の活動は、イギリス「帝国」の形成に寄与したが、オランダにはそういうことはおこらなかった。オランダ商人は、どちらかといえば、少なくとも長期的には現地に同化し、母国との関係をなくしていく方向での商業活動に比較優位を見出したのである。そもそも18世紀になると、オランダ政府がオランダ商人を保護し、保護費用を国家が負担することでオランダ商業を活発にすることができるほど、オランダ国家は強力ではなかった。共和国時代のこの国家の特徴は、あくまでその分裂性にあり⁵⁷⁾、中央集権制が強化されるのは、王国になるのを待たなければならない⁵⁸⁾。

オランダの「黄金時代」は17世紀中葉であり、他の国々も中央集権化が進んでいなかったのに、オランダはヘゲモニー国家となれたのかもしれない。しかし他国が保護主義政策をとり、中央集権化を進めると、オランダの政治制度は時代にそぐわなくなっていったのだろう⁵⁹⁾。

英蘭を比較すると、イギリスの商人は現地に同化せず、イギリスに富を持ち帰ったのに対し、オランダ商人はさまざまなノウハウをもって移動しながら、それをオランダの国富形成に活かしていなかった印象を受ける。それは、イギリスが中央集権化し、重商主義政策で商人を保護し、彼らの利益をイギリス全体の利益に取り入れようとしたのに対し、オランダはあまりに分権的、むしろ分裂の国家であり、そうすることに関心がなかったからだろう。国家が商人を保護すれば、商人が負担していた費用を国家が肩代わりすることになり、当然、取引費用は低下する。したがって、イギリスの貿易がオランダの貿易以上に盛んになったのである。重商主義時代の英蘭の貿易政策の差は、このような結果ももたらした。

6. 国際収支と手数料収入

国家と商人の関係を論ずるにあたり、重要になってくるのが「国際収支」の概念である。

しかし近世の「国際収支」の定義は、今日のそれとは大きく異ならざるをえない。たとえば1996年以降日本が採用している方式によれば、国際収支は大きく(1)経常収支、(2)資本収支、(3)外貨準備増減、(4)誤差脱漏の四つに分かれる。それに対し近世においては、貿易収支と貿易外収支を合わせたものが国際収支であり、むしろ今日の経常収支に近い概念だと考えたほうが良いだろう。

従来日本の研究では、貿易収支(貿易差額)に大きな関心が寄せられており、国際収支の問題

57) タールト (2002).

58) Fritshy (1988)

59) Cf. Ormrod (2003).

はほとんど取り上げられてこなかったように思われる。しかし私は、商業史・経済史の観点からは、国際収支の方が重要であると主張したい。

たとえば17世紀中頃のイングランドで、スウェーデンからの銅輸入量の三分の二を扱ったとされるメアスコウ・デヴィッド商会の文書 Marescoe & David Letters⁶⁰⁾ を読めば、手数料収入、輸送費用の比率が大きいことに気づくはずである。

輸送費用について、長期の時系列を示したのはミルヤ・ファン・ティールホフである。彼女によれば、結局、取引費用の中で最も大きかったのが輸送費用であり、それが低下傾向にあった⁶¹⁾。

もとよりこれらはいくつかの事例を提供するに過ぎず、どこまで一般化可能かはわからない。しかし近世においては極めて輸送費用が高かったことは明らかなのだから、マクロ経済的議論をする場合、貿易収支ではなく、国際収支をもとに論を立てるべきだろう。次に、貿易収支ではなく国際収支の問題を考えなければならないという理論的根拠をさらに提示してみたい。

一般に、A国とB国の貿易で、B国が貿易赤字である場合、その補填のためにB国はA国に貴金属を輸出するといわれている。しかし、それは本当だろうか。たとえばフリンがアジアとヨーロッパとの貿易に関し述べたように、赤字国から黒字国へと銀が流出するとは限らない。彼は、ヨーロッパとアジアの貿易はヨーロッパ側の赤字であり、銀はアジアからヨーロッパに流れたが、金はアジアからヨーロッパに流出したと主張する⁶²⁾。ここからも、これまでの単純な議論は成立しないことがわかるだろう。

ここでもう少し議論を限定してみよう。A国とB国という二国しかなく、この二国間の貿易はA国の黒字、B国の赤字であり、貿易は海上貿易のみで、すべてがB国の船で行なわれ、さらに輸送料の支払いに為替は使われず、すべて銀で決済されるものとする。とすれば、貿易収支の赤字を補填すべくB国からA国に銀が輸出されるはずであるが、それと同時に、A国からB国に輸送料を支払わなければならないはずである。この場合、銀はA国からB国にも輸出されることになる。また仮にA国の貿易黒字額がB国の輸送料よりも少なかったなら、A国からB国への銀の輸出はあっても、その逆は成り立たないであろう。

モデルをもう少し複雑にしよう。A国とB国の貿易はすべて海上貿易であり、A国の黒字、B国の赤字であり、C国の船舶がすべての商品を自己勘定で輸送している場合を想定してみたい。この場合、B国からA国に銀が流出し、A国もB国も、C国に輸送料として銀を輸出することになる。

ここから判明するように、事態は思った以上に複雑である。貿易収支の赤字国が黒字国に貴金属を輸出しなければならない論理的根拠はない。もしあるとすれば、決済はすべて双務決済であり、取引費用がゼロの場合に限られる。いうまでもなく、このような世界は現実には存在しない。ここからも貿易収支ではなく、国際収支の次元で議論しなければならないことがわかる。この分野に関

60) Roseveare (1991).

61) ティールホフ (2005).

62) Flynn and Giraldes (2005).

表1 イングランドとウェールズからのオランダへの輸出額（再輸出を含む）と輸入額（年平均）⁶³⁾

年 度	1701-05	1711-15	1721-25	1731-35	1741-45	1751-55	1761-65	1771-75
輸 出	2,048	2,214	1,908	1,877	2,252	2,786	2,066	1,846
輸 入	562	531	551	510	415	306	440	457
差 額	1,486	1,683	1,357	1,367	1,837	2,480	1,626	1,389

単位：1,000 ポンド

するこれまでの研究は、取引費用を無視していた点に、大きな問題点があるように思われる。ようするに、取引費用ゼロという仮想の世界での議論でしかなかったのである。

また別の事例を提供しよう。表1は、18世紀の英蘭の貿易額を示したものである。ここから、イギリス側の黒字であり、オランダの赤字であることは簡単にわかる。しかしこの表はまた、一国の貿易統計をもとに分析する限界も示している。

イギリスからオランダに輸出された商品がオランダを経由して大量に別の国に再輸出されるならば、オランダにとって対イギリス貿易の赤字は何の問題にもならない。むしろイギリスは、オランダを通さなければ輸出できなかったという点で、経済的に大きなマイナス要因があったことになる。このような陥穽から逃れるためには、イギリス史家は、オランダ側の貿易統計も利用しなければならない。そして再輸出によってオランダがどの程度、さまざまな手数料収入を稼いでいたのかということが、イギリス史にもオランダ史にも、重要な問題となるはずである。

貿易統計は通常各国ないし港ごとに作成される。この記録からは、輸送料はわからない。全国の貿易統計であっても、単に貿易収支がわかるだけである。またある国に輸出された商品が最終的にはどこに輸出されたのかはわからない。そのため、この種の記録に依拠する量的分析だけでは、国際収支や再輸出を重視する国際商業史・国際経済史の観点からは、おそらく不十分な成果しか得られないだろう⁶⁴⁾。

それを補うのが、商人の取引記録である。しかし商人の記録は断片的であり、ごく少数の商人の記録をいくら丹念に分析しても、その結果得られる成果が、どこまで一般化できるはなかなかわからない（経済学でいうノイズにあたるかもしれない）。たとえば「代表的商人」と簡単にいうが、それは史料の残存状況によって決定されるにすぎず、全体を「代表する」ということ自体、実は極めて恣意的な発言でありうる。いうまでもなく、失敗した商人の記録はなかなか残らない。歴史家は、極めて限定された史料しか入手できないのである。このような中で商人世界の全体像を構築することは、現実には一般に考えられる以上に困難だといわざるをえない。

商人が得ていたさまざまな手数料収入は、近世世界でのマクロ経済学の次元でいうと貿易外収支にあたる。したがって商人の委託事業の研究は、本来ならよりマクロな次元である国家の経済状況

63) Schumpeter (1960), Table V and VI より作成。

64) また、少数の商品に関してさえ、最終的消費地がどこかということを研究者が、突き止めることは現実には非常に難しい。

の研究と大きく重なるはずである。今後、この二つを重ね合わせた研究の進展が望まれよう。いわばここで、量的研究と質的研究が連動するからである。とはいえ残念ながら、この実現が到底簡単とはいえないことも事実である。

しかしもし経済史研究を進めていくなら、いずれこの問題に逢着せざるをえない。たとえばオランダは確かに毛織物工業・農業でも栄えたが、中継貿易が最も重要だった。だとすれば輸送料・手数料による（貿易外収支に属する）収入が、オランダ経済の根幹を支えたはずだからである。この研究が、同時に重商主義時代のヨーロッパ経済の研究にとっても重要なことはいうまでもない。各国が恐れたのは、オランダの工業力よりも、むしろ海運力だったからである。

お わ り に

本稿は「覚書」であり、現在のヨーロッパの経済史・商業史の動向の一部を私なりに整理し、その特徴や問題点を述べたものにすぎない。このようなモノグラフの結論部分を書くことは非常に難しい。これからの研究の展望を書くことしか残されていないように思われる。

本稿で論じたことの一つは、取引費用がどこまで分析道具として有効なのかということである。それに関しては既に指摘しておいたように、これは一国史の枠組みでは有効であっても、比較史はできないという点で大きな限界をもつという主張をした。

また取引費用の概念からは、経済の成長は説明できても、経済の発展は説明できないように思われる。言い換えるなら、経済学のグラフで、同一曲線上での変化は説明できるものの、曲線そのもののシフトを説明することはできないのではないか。ある取引費用が急激に低下すると、確かに経済活動はしやすくなるだろうが、その成果が「革新的」であり、経済の質的变化をもたらすかどうかは、取引費用の概念からはわからない。これは現在の商人＝企業家論の問題点でもある。私は、シュムペーターの考え方に従うなら生産曲線そのものを上方にシフトさせる役割を担うべき企業家が、単に同一の生産曲線上の移動をしているという前提で論者が議論を進めている点に矛盾を感じる。そもそも企業家活動自体が経済に質的な変化をもたらすものであるもので、取引費用——本質的に量的概念である——の低下をもたらす企業家という概念には問題があるのではないか。企業家の理論的ベースとしてシュムペーターを持ち出しながら、生産曲線そのものをシフトさせ、経済発展の担い手となる企業家という概念を無視するのは、大きな問題点だと指摘せざるをえない。

このような観点から考えると、もし可能なら、全要素生産性の伸びを考察の対象にした企業家論が書けるに越したことはない。企業家が連続的な経済成長ではなく、過去と断絶をもたらすような経済発展の担い手であるなら、単なる投入量の増大や人口増などの要因では説明できない「残余」(residue)をもたらす人を指すはずである⁶⁵⁾。

だが推計に推計を重ねて計算した全要素生産性に、どこまで信頼がおけるのかということについては、非常に大きな疑問符が投げ掛けられて当然である。しかしたとえば、そもそも近世における

国内総生産でさえ極めてあやふやな統計さえ得られないなら、国内総生産をもとに議論を進めること自体に問題があるはずだろう。全要素生産性については、国内総生産より信憑性の低い推計値しか得られないのは事実であるが、企業家について論じるのであれば、現在の経済学の潮流では、全要素生産性を抜きにしては語れまい。もしオランダの経済発展がそれまでの事例と異なり、全要素生産性を伸ばし、その担い手が貿易商人 = 企業家であるなら、オランダの貿易発展こそが最初の近代経済の発展だと証明できよう。

さらに本稿で論じたことに、貿易統計を重視する量的研究と、商人の活動を重視する質的研究の接合がある。この二つは、貿易外収支という点で大きく交差する。しかし現実の研究では、一人の研究者がこの二つを同時に行なうことは、一次史料の大量の利用という点から考えても、ハードルはかなり高い。

ただこのような研究こそが、あたり前のことではあるが、今後目指していくべき方向だと私は考える。

これまでヨーロッパの貿易史研究は、バルト海貿易の場合量的研究に、地中海貿易の場合質的研究に偏っていたことは否めないし事実であろう。それはおそらく一つには、残存する史料状況に由来する⁶⁵⁾。すなわちバルト海貿易では貿易統計の方が、地中海貿易では商人文書の方が利用しやすかったからであろう。ただ近年急速に、バルト海地方の研究でも商人の研究は進んでおり、たとえばティールホフ⁶⁷⁾やミュラー⁶⁸⁾、プルシャス⁶⁹⁾の研究にみられるように、少なくともバルト海貿易においては、量的・質的両方の研究を総合する方向で研究が進んでいるように思われる。地中海の商業史研究においても、貿易統計を長期的に時系列で利用し、それを商業活動の変化と関連させることが必要であろう。

最後に論じたいことは、商人ネットワークの三層構造の重要性である。ともすればこれまでの国際商業史の商人研究は、自分たちの居留地があり、独自のネットワークをもつ商人に焦点が当てられる傾向が強かったように感じられる。しかし現実の取引は、貿易先の商人との協力関係なしでは貿易はできなかつたはずである。また貿易先に住み着いていく商人がいなかつたとしても、貿易の持続は難しかつただろうし、貿易技術の伝播はなかつただろう。このように、国際貿易には、三層の商人層があり、それぞれが独自の役割を果たしていたと考えるべきであろう。この三層の商人の役割分担、互いの協力関係がわかれば、国際商業史研究に新たな道が開かれよう。

これらはそれぞれ非常に困難ではあるが、それぞれ今後研究を進めていく必要がある分野だと思われる。本稿で示そうとしたのはその重要性であり、実証は、今後の私の課題となる。

65) シュムペーター (2004) 237.

66) また日本の場合、地中海貿易は文学部関係者が、バルト海貿易は経済学部関係者が研究することが多かつたことも理由の一つだろう。

67) ティールホフ (2005).

68) Müller (2004a).

69) Pourchasse (2003).

参 考 文 献

- Andersen, Dan, H. (2000) *The Danish Flag in the Mediterranean: Shipping and Trade, 1747–1807* (Ph. D. Thesis, University of Copenhagen, 2 Vols).
- Brulez, W. (1960) “De Diaspora der Antwerpse koopkui op het einde van de 16e eeuw”, *Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, 15, 279–306.
- Bogucka, Maria (2003) *Baltic Commerce and Urban Society, 1500–1700*, Ashgate.
- Bonney, Richard., ed. (1995) *Economic Systems and State Finance*, Oxford.
- Boon, P. (1996) *Bouwers van de Zee: zeevaren van het Westfriesse platteland, c. 1680–1720*, Den Haag.
- Butel, Paul (1974) *Les négociants bordelais: l'Europe et les Iles au XVIIIe siècle*, Paris.
- Coase, Ronald, H. (1960) ‘The Problem of Social Cost’, *Journal of Law and Economics*, 3, 1–44.
- Flynn Dennis and Arturo Giraldes (2005) “Globalization Began in 1571” Paper presented to Global History Workshop at Osaka University on February, 7, 2005.
- Fritschy, J. M. F. (1988) *De patriotten en de financien van de Bataafsche Republiek: Hollands Krediet en de smalle marges voor een nieuw beleid (1795–1801)*, Den Haag.
- Fritschy, Wantje (2003) “A ‘Financial Revolution’ Reconsidered: Public Finance in Holland during the Dutch Revolt, 1568–1648”, *Economic History Review*, 2nd ser., 54, 57–89.
- Gelderblom, Oscar (2000a) *Zuid-Nederlandse kooplieden en de opkomst van de Amsterdam stapelmarkt (1578–1630)*, Hilversum.
- (2000b) “Antwerp Merchants in Amsterdam after the Revolt”, in P. Stabel, B. A. Greve (eds.), *International Trade in the low Countries (14th–16th Centuries): Merchants, Organization, Infrastructure*, Leuven, 2000, 223–241.
- (2002) “Uitdagingen voor de Vroegmoderne Ondernemers-geschiedenis”, *NEHA bulletin*, 16, 2002, 77–78.
- (2003a) “The Governance of Early Modern Trade: The Case of Hans Thjis, 1656–1611”, *Enterprise and Society*, 4, 2003, 606–639.
- (2003b) “From Antwerp to Amsterdam: The Contribution of Merchants from Southern Netherlands to the Rise of the Amsterdam Market”, *Review: A Journal of Fernand Braudel Center*, 26, 247–282.
- Gelderblom, Oscar and Joost, Jonker (2004) “Completing a Financial Revolution: The Finance of the Dutch East India Trade and the Rise of the Amsterdam Capital Market, 1595–1612”, *Journal of Economic History*, 64, 641–672.
- Gelderblom, Oscar and J. L. van Zanden (1997) “Vroegmodern ondernemerschap in Nederland”, *NEHA bulletin* 11, 3–15.
- Goey, Ferry de and Jan W. Veluwenkamp eds. (2002) *Entrepreneurs and Institutions in Europe and Asia 1500–2000*, Amsterdam.
- Grafe Regina (1998) *Der spanische Seehandel mit Nortwesteuropa von der Mitte ses sechzehnten bis zur Mitte des siebzehnten jahrhunderts*, Seebrücken.
- (2001) “Atlantic Trade and Regional Specialisation in Northern Spain 1550–1650: An Integrated Trade Theory-Institutional Organisation Approach”, Working Paper 01–65 Economic History and Institutions Series 02 November 2001, Economic History and Institutions Dept. Universidad Carlos III de Madrid.
- ’t Hart, Marjolein (1989) “Public Loans and Moneylenders in the Seventeenth Century Netherlands”, *Economic and Social History in the Netherlands*, 1, 119–140.
- (1993) *The Making of a Bourgeois State: War, Politics, and Finance during the Dutch Revolt*, Manchester and New York.
- Huhn, F. K. (1952) *Die Handelsbeziehungen zwischen Frankreich und Hamburg im 18. Jahrhundert unter besonderer Berücksichtigung der Handelsverträge von 1716 und 1769* (Dissertation zur Erlangung der Doktorwurde der Philosophischen Fakultät der Unversität Hamburg).
- Klein, P. W. (1965) *De Trippen in de 17e eeuw. Een studie over het ondernemersgedrag op de Hollandse stapelmarkt*, Assen.

- Klein, P. W. and J. W. Veluwenkamp (1993) "The Role of the Entrepreneur in the Economic Expansion of the Dutch Republic", Karel Davids and Leo Noordegraaf eds., *The Dutch Economy in the Golden Age*, Amsterdam, 27–53.
- Kooy, T. P. van der (1931) *Hollands stapelmarkt en haar verval*, Amsterdam.
- Lane, Frederick (1979) *Profits From Power: Readings in Protection Rent and Violence-Controlling Enterprises*, Alnamy.
- Lesger, Clé (1999) 'De mythe van de Hollandse wereldstapelmarkt in de zeventiende eeuw', *NEHA Jaarboek* 62, 6–25.
- (2002) *Handel in Amsterdam ten tijde van de Opstand: Kooplieden, commerciale expansie verandering in de ruimtelijke economie van de Nederlanden ca. 1550–ca.1630*, Hilversum, 2002.
- Müller, Leos (1998) *The merchant Houses of Stockholm, c. 1640–1800: A Comparative Study of Early-Modern Entrepreneurial Behavior*, Uppsala.
- (2004a) *Consuls, Corsairs, and Commerce: The Swedish Consular Service and Long-distance Shipping, 1720–1815*, Uppsala.
- (2004b) "Konsumtionsrevolution och tropiska produkter i 1700-talets Sverige", *Historisk tidskrift* 2004/2, 225–248.
- Neal, Larry (1990) *The Rise of Financial Capitalism: International Capital Markets in the Age of Reason*, Cambridge.
- Ojala, Jari (1999) *Tehokasta liiketoimintaa Pohjanmaan pikkukaupungeissa: Purjemerenkulun kannnttaavuus ja tuottavuus 1700–1800-luvulla*, Helsinki.
- (2004) "Assesing Institutional Boundaries of Early Modern Business Activities: Organization of Shipping and Trade during the Eighteenth and Nineteenth Centuries", 『関西大学西洋史論叢』 第7号, 1–23.
- Tielhof, Milja van (1995) "Der Getreidehandel der Danziger Kaufleute in Amsterdam um die Mitte des 16. Jahrhunderts", *Hansische Geschichtsblätter*, 113, 93–110.
- Ormrod, David (2003) *The Rise of Commercial Empires: England and the Netherlands in the Age of Mercantilism, 1650–1770*. Cambridge.
- Roseveare, Henry ed. (1991) *Market and Merchants of the Late Seventeenth Century: The Marescoe-David Letters 1668–1680*, Cambridge.
- Pourchasse, Pierrick (2003) *La France et le commerce de l'Europe du Nord au XVIIIème siècle* (Thèse de Doctrant, Université de Bretagne-Sud).
- Schumpeter, Elizabeth, B. (1960) *English Overseas Trade Statistics, 1697–1808*, Oxford.
- Steensgaard, N. (1974) *The Asian Trade Revolution of the Seventeenth Century: The East India Companies and the Decline of the Caravan Trade*, Chicago.
- Veluwenkamp, Jan Willem (1981) *Ondenemersgedrag op de Hollandse stapelmarkt in de tijd van de Republiek: De Amsterdamse handelsfirma Jan Isaac de Neufville & Comp., 1730–1764*, Meppel, 1981.
- Voss, Peter (1995) "A Community in Decline?: The Dutch Merchants in Bordeaux, 1650–1750", in C. Lesger and L. Noodegraaf, eds., *Entrepreneurs and Entrepreneurship in Early Modern Times: Merchants and Industrialists within the Orbit of the Dutch Staple Market*, The Hague, 43–52.
- Voss, Peter (1988) ">>Eine Fahrt von wenig Importantz?<< Der hansische Handel mit Bordeaux", in A. Grassmann (Hg.), *Niedergang oder Übergang?: zur Spätzeit Hanse im 16. und 17. Jahrhundert*, Köln, 93–138.
- Vries, Jan de and Ad van der Woude (1997) *The First Modern Economy: Success, Failure and Preseverance of the Dutch Economy, 1500–1815*, Cambridge.
- Weber, Klaus (2000) "Die Admilalitätszoll- und Convoygeld-Einnahmebücher. Ein wichtige Quelle für Hamburgs Wirtschaftsgeschichte im 18. Jahrhundert", *Hamburger Wirtschafts-Chrnik*, Neue Folge, 1, 83–112.
- (2002) "The Atlantic Coast of German Trade: German Rural Industry and Trade in the Atlantic", 1680–1840, *Itinerario: European Journal of Overseas History*, 26, 99–119.

—— (2004) *Deutsche Kaufleute im Atlantikhandel 1680–1830*, München.

岡崎哲二 (1999) 『江戸の市場経済』講談社。

岡崎哲二・中林真幸 (1999) 「序章 経済史研究における制度」岡崎哲二編『取引制度の経済史』東京大学出版会, 1–12.

杉浦未樹 「アムステルダムにおける商品別専門商の成長 1580～1750年——近世オランダの流通構造の一断面——」『社会経済史学』第70巻1号, 49–70.

川北稔 (1983) 『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン——』岩波書店, 1983年。

深沢克己 「序章 年市と開港のヨーロッパ史」同編著『近代ヨーロッパの探究9 国際商業』ミネルヴァ書房, 1–18.

—— (1999) 「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」(『岩波講座世界歴史 15 ——商人と市場——ネットワークの中の国家』岩波書店) 181–207.

ウォーラーステイン, イマニュエル著, 川北稔訳 (1981) 『近代世界システム』I・II, 岩波書店。

オプライエン, パトリック・K 著, 玉木俊明訳 (2004) 「西欧の産業市場経済成長における企業家と企業家精神」『商経学叢』第51巻第1号, 233–251.

シュムペーター J・A 著, 塩野谷裕一, 中山伊知郎, 東畑精一訳 (1977) 『経済発展の理論』上・下, 岩波文庫。
タールト, マーヨレイン著, 玉木俊明訳 (2002) 「17世紀のオランダ——世界資本主義の中心から世界のヘゲモニー国家へ? ——」松田武・秋田茂編『ヘゲモニー国家と世界システム——20世紀をふりかえって——』山川出版社, 17–76.

チャンドラー・アルフレッド・Jr 著, 鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳 (1977) 『経営者の時代——アメリカ産業における近代企業の成立——』上・下, 東洋経済新報社。

ティールホフ, ミルヤ・ファン著, 玉木俊明・山本大丙訳 (2005) 『近世貿易の誕生——オランダの「母なる貿易」——』知泉書館。

ノース, ダグラス・C, 竹下公視訳 (1993) 『制度・制度変化・制度成果』, 晃洋書房)。

ノース, ダグラス・C, トマス, ロバート・P 著, 速水融・穉本洋哉訳 (1994) 『西欧世界の勃興』ミネルヴァ書房。

ミュラー, レオス著, 玉木俊明訳 (2004) 「18世紀ストックホルム商人の社会——競争関係と協力関係の渦中の外国人とスウェーデン人——」『関西大学西洋史論叢』第7号, 74–86.

‘Memoire’ on Commercial and Economic History of Europe in Early Modern Age: With Special Reference to the Netherlands

Toshiaki TAMAKI

ABSTRACT

In this article I have investigated various aspects of early modern European commercial and economic history and enumerated some important respects for commercial and economic history. In the first section, I have argued the importance of transaction costs. In the second section, I have paid attention to the formation of staple markets. In the third section, the rise of the Netherlands was the main topic. In the fourth section, the features of early modern commerce has been taken up. In the five section, I have treated features of merchants network. In the six section, the importance of the relation between balance of payments and commission of merchants. And last, I have enumerated important respects for further research.